



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

2020年8月2日 年間第18主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読 イザヤ書 55章 1-3節

第二朗読 ローマの信徒への手紙 8章 35、37-39節

福音朗読 マタイによる福音書 14章 13-21節

今日のテーマ：主のもとでこそ満たされる

三つの朗読から

三つの朗読には象徴、イメージの数々が散りばめられています。第一朗読は「さあ、渇いている者は誰でも、水のある所に来るがよい」(1節 フランシスコ会訳)で始まります。ユダヤ教の伝統では、ここでの「水」はトーラー、神のことばの象徴を意味していると伝えられています。そんな背景に基づいて今日の朗読箇所を読んでみると「わたしに聞き従えば良いものを食べることができる」(2節)、「耳を傾けて聞き」(3節)と、ことば、しかも神のことばに関するイメージが浮き上がってくるでしょう。第二朗読でも象徴が語られます。「だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。……神の愛から、わたしたちを引き離すことはできません」(35、39節)。物理的に何かから引き離されることは人生の中で滅多にありません。それでも、精神的に、あるいはこころのうで引き離された体験は数多くあるものです。愛してくださる方から引き離されるのは辛いのです。しかし、どんな状況に陥ったとしても、先にわたしたちを愛してくださったイエスさまの愛の結びつきから解かれることは決してありません。福音朗読ではパン、そして満腹という象徴的な表現が登場します。イエスさまがパンを取り、「天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて」(19節)くださると、パンが「すべての人が食べて満腹」するいのちの食べ物へと変わります。パンとは神さまのことば、そして神さまのことばが人となられたイエスさまご自身(ヨハ1章14節参照)。このパンをいただいて、わたしたちはイエスさまの愛に強く結ばれるのです。

今日の聖句

弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」
イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、(マタ 14 章 17-18 節)

今日の福音朗読の中の小さなことば、「ここには」、「ここに」に注目しましょう。群衆に食糧が不足していることはイエスさまとお弟子さんとお互いに理解合っています。しかし、食糧を得る方法がイエスさまとお弟子さんたちとは違っているようです。「ここ」はギリシア語でホーデですが、『マルコによる福音書』の並行記事にはこのことばは登場しません。お弟子さんたちは、群衆のために食糧を得るためには、彼らを町に戻らせ、自分たちで買い求めることをしなければならぬと考えています。「そうすれば、自分で村へ食べ物を買いに行くでしょう」(15 節)。しかし、イエスさまは違います。「パン五つと魚二匹」しかないという、限られた食物しかない「ここ」(ホーデ)こそが、食べ物を与える場所だと考えています。17 節と 18 節にある同じ「ここ」でも、お弟子さんたちの考えている内容とイエスさまがお考えになっている内容とが異なるのです。

18 節を直訳すると「それらをわたしのもとに、ここに持ってきなさい」となります。つまり、イエスさまがお考えになる「ここ」とは「わたし」がいる場所なのです。イエスさまが共にいてくださる「ここ」こそが、人生に疲れ、途方に暮れている大勢の群衆を満たしてくれる場所となります。

お弟子さんたちは、群衆を「満腹」(20 節) させるためには「ここ」ではなく、「あちこちの村」(15 節 フランシスコ会訳) だと考えていました。そこで食べ物を手に入れることができるかもしれないからです。しかし、人間を「満腹」にして、人間の必要性を満たすのは「町や村」という社会ではなく、イエスさまがおられる「ここ」(18 節) なのです。それは「人里離れた所」(13 節) です。神さまはイスラエルの民を荒野で 40 年間にわたって養いました。同じようにイエスさまは群衆を「人里離れた所」へと導き、「[パンを] 取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて…お渡し」(19 節) になって養ってくれるのです。イエスさまの「祝福する」、「与える」という所作に注目するためには社会の中に埋没してはならないのです。いずれこの群衆も自分たちがそれぞれ住んでいる「町や村」へと帰っていったことでしょう。その時、彼らにとっての「ここ」とは、以前のような厳しく、空虚な「ここ」ではなく、イエスさまと共にいる「ここ」へと変わっていったのだと思います。